

# 日本社会における『82年生まれ、キム・ジョン』の受容

—日本の女性は自らの生をどう言語化したのか—

福 島 みのり

A study on the acceptance of the Korean feminist novel  
*Kim Ji-young, born 1982* in Japan

Minori FUKUSHIMA

2019年11月11日受理

## 抄 録

韓国で100万部のベストセラーとなったフェミニズム小説『82年生まれ、キム・ジョン』が、隣国の日本においても13万部を超えるベストセラーとなった。日本の女性の多くが本書を通じて「私の物語」を発見し、国境を越えた共感を表した。本稿は、この小説に共感した日本の読者が自らの生をどう言語化したのかを読者レビューをもとに分析した。この小説を通じて、自分を表現する「言葉」を得た読者は、学校教育におけるジェンダーの格差、就職活動と職場におけるMe Too経験、退職と社会復帰におけるキャリア断絶など女性を取り巻く矛盾した社会を発見し、語り始めた。だが、Me Too運動がグローバルな規模で拡大していく中、女性同士の連帯にまでつながらない日本社会の問題はどこにあるのか。本稿はこの問いに答えるための予備研究でもある。

キーワード：K文学、フェミニズム、私の物語、re-vision（省察）、連帯する読者

### はじめに：普遍性を獲得したk文学ブーム

2016年、韓国で刊行されたフェミニズム小説『82年生まれ、キム・ジョン』（著者：チョ・ナムジュ、訳：斎藤真理子、筑摩書房）は、韓国内で異例の100万部を超えるベストセラーとなった。本書は、主人公キム・ジョンの半生が描かれる中で、学校生活、就職、結婚、育児にいたるまで女性の人生に潜むさまざまな差別と困難が描かれており、次第に精神を崩壊させていくキム・ジョンの姿を通して女性を息苦しくする社会構造を描いている。出版以降、日本をはじめアジア、欧米の18ヵ国で翻訳され、日本でも韓国文学としては異例の13万部を超えるベストセラーとなった。日本ではその後、韓国のフェミニズム小説を含む同時代の小説が続々と翻訳され、今や出版市場に「k文学」という言葉が定着し、韓国文学関連の数々のイベントが開催されるよ

うになった。

『82年生まれ、キム・ジョン』はなぜこれほどのベストセラーとなったのか。そこには、日本の女性の多くが本書を通じて「私の物語」を発見し、国境を越えた共感を得たことが大きな要因といえる。この点は、現在 k-pop ブームが「かっこいい」「可愛い」といった「普遍性」を獲得したのと同様、k 文学も「私の物語」「共感」といった「普遍性」を獲得したことがその背景にあるといえる。注目すべき点は、k-pop が「見る」「聴く」という行為において視覚的かつ受動性を帯びているのに対して、k 文学は「読む」行為、すなわち一定の時間を要するという点で能動性に基づく行為であるにも関わらず大ヒットした点である。

これほどまでに影響力を及ぼした『82年生まれ、キム・ジョン』が日本女性に投げかけた問いとは何であったのか。日本の読者は本書を通じて自身の経験をどう言語化していったのか。本稿では、読者レビューを中心に、『82年生まれ、キム・ジョン』が「文学の場」を超えて「社会的な現象」になった理由として、女性読者（男性も含む）の多くが「re-vision（省察）」を通じて、女性を取り巻く生のあり方を「個人の問題」から「社会の問題」としての気づきを得た点に注目する。

以下、第2章では『82年生まれ、キム・ジョン』のテキスト分析および韓国での評価を紹介する。第3章では、日本社会における『82年生まれ、キム・ジョン』ブームの流れを検討し、読者のレビューの分析として1) 言葉を与えられた読者、2) 学校教育におけるジェンダーの格差、3) 就職活動と職場における Me Too 経験、4) 退職と社会復帰におけるキャリアの断絶の4つの視点から考察する。終章では、日本社会におけるフェミニズム運動の現在（日本版『82年生まれ、佐藤由美子』は生まれるのか？）について総括し、キム・ジョン現象が投げかけた社会的課題について考察する。

キーワード：K 文学、フェミニズム、私の物語、re-vision（省察）、連帯する読者

## 第2章 『82年生まれ、キム・ジョン』：著者紹介とテキスト分析

### 1) 著者紹介

チョ・ナムジュ（1987年生まれ）は、長年ラジオの時事・教養番組の作家として活躍し、2011年、長編小説『耳をすませば』で文壇デビューした。その後『コマネチのために』（2016年）を発表、2016年『82年生まれ、キム・ジョン』がミリオンセラーとなり、一躍現代韓国を代表する作家となった。時事番組の作家らしく、『耳をすませば』から徹底的にドキュメンタリー的な手法で、生の不条理や疎外を扱ってきた。チョ・ナムジュは、本書を執筆した動機について次のように語った。「私は、誰も女性だからという理由で卑下や暴力の対象になってはならないと考えてきました。女性たちの人生が歪んだ形で陳列され、好き勝手に消費されていると感じました。

女として生きること、それにとまなう挫折、疲労、恐怖感。とても平凡でよくあることだけれど、本来は、それらを当然のこのように受け入れてしまってはいけません。そういう物語を書きたいと思い、そこから『82年生まれ、キム・ジョン』という小説ははじまりました。(本書, p171)』

## 2) テクスト分析

キム・ジョンは2015年現在、33歳。3年前に結婚し、昨年女の子を出産。IT企業に勤める夫との3人暮らしである。ストーリーは、キム・ジョンが秋夕(韓国のお盆)に夫の実家に里帰りする際に、母親や友人が憑依したかのように振舞う様子からはじまる。「お宅だけが家族ですか?うちだって家族なんですよ。お宅の娘さんが帰省しているんだったら、うちの子だって里帰りさせてくださいよ」。育児や家事ストレスをはじめとし、家族イベントがすべて夫の実家を中心にまわることですっかり疲弊しまったキム・ジョンは、精神科に通いはじめる。本書は、医者のカルテに沿った形でこれまでの過去を追体験するストーリー展開となっている。女性の名前は明記されているものの、男性の名前は夫のジョン・テヒョン以外名前は登場しない<sup>1</sup>。なお、キム・ジョンという名前は、82年生まれに最も多かった名前である。以下、本節では『82年生まれ、キム・ジョン』を①家庭:男児選好を取りまく祖母・母・娘の葛藤、②学校・社会での女性の周辺化と性的なまなざしへの葛藤、③妊娠・出産を取り巻く社会でのまなざし、④家事・育児を「手伝う」やさしい夫と世間(男性)のまなざし、⑤社会復帰をしたものの:「経断女」の葛藤の視点からまとめる。

### ① 家庭:男児選好を取りまく祖母・母・娘の葛藤

キム・ジョンが小学校までの過ごした時期の思い出は、家庭での父親や弟を取り巻く食事のシーンである。配膳は父、弟、祖母の順になされた。姉とキム・ジョンは一部屋を共同で使い、弟は一人部屋を与えられた。雨の日、弟は傘を1つ与えられ、姉妹は一本の傘を使用した。韓国社会での男児選好はキム・ジョンの母に対して大きなプレッシャーを与えてきた。祖母は4人の息子を育てたことを誇りに思っていた。母は最初の子供が娘であったとき、2人目も娘であったときは、祖母に「申し訳ありません」と謝った。3人目は息子を産めばいいと言われ、母は3人目のキム・ジョンの妹を中絶し、その後に生まれたのが弟であった。家庭では、弟のみ優遇される状況に姉妹が違和感を持ち始め、常に料理や掃除等の手伝いをしてきたジョンの姉は、母親に向かって、「うちで家事も何もしない人、一人だけだよ」と弟をにらむと、「まだ小さいじゃないか」「だって末っ子じゃない?」と応答する母親に、「末っ子だからじゃないでしょ、男の子だからでしょ!」と反発した。若い世代が男女平等という価値観を内面化していても、親、祖父母世代との関係性の中で、依然男性が優遇される状況に姉やジョンは違和感を持ち続けている。(特に、日本の読者には理解しがたいほどに、儒教的な男尊女卑の風習まで赤裸々に描写されている。)

## ②学校・社会での女性の周辺化と性的なまなざしへの葛藤

家庭での女性の周辺化はもとより、学校や社会では女性というだけで差別されると同時に、性的被害から自分を守らなければならないという点で、女性にとって2つの障壁が立ちはだかっている様子が描かれている。キム・ジョンが通っていた学校では、スカートの丈や下着の色など女性の服装に対する過度な禁止項目があった。また夜道に男性から被害にあった場合は、「服装をきちんとしろ」と父親から立ち振る舞いや服装に関する忠告を受けたのである。

一方、就職活動の際には、希望の会社に出身大学から入社した先輩がいたものの、女性ではなく男性であったこと、面接での質問がセクハラの対応であったことなど、女性というだけで被るさまざまな屈辱を経験する。結局、キム・ジョンはある広告代理店に内定を得て働き始める。職場には女性の上司がおり、女はだめだと言われられないように、残業や出張も自分から買って出て、出産後も一ヶ月で復帰した。彼女にとってははじめはそれが誇りだったが、結果的に出産と育児による休暇や休職も当然の権利なのにとらななかったことで、後輩の権利まで奪ってしまうことになった。また、会社がある企画チームを立ち上げることになり、キム・ジョンは女性の上司に企画への意欲を伝えるなどしたものの、結局選ばれたのは同期の2人の男性であった。社長は、業務と結婚生活、育児との両立が難しいことを知っており、女性社員は数に入れていなかった。この話を聞いた飲み会で、キム・ジョンはまた、入社以来ずっと男性の同期たちの年俸が自分たちよりも高かったことを知った。女性にとって、男性に劣らざるがばることが果たして男性同様の評価が得られるのか。男性中心の社会に疑問を投げかけている。

## ③妊娠・出産を取り巻く社会でのまなざし

結婚をすると、親や親戚は「子供」への期待を口にするものの、社会で自分なりの居場所を築き、働いてきた女性にとって、これまで続けてきたキャリアや社会でのネットワークが途切れてしまうことへの不安がある。キム・ジョンは結婚後、親や親戚の年長者たちが「よい知らせ」を待っていることをプレッシャーに感じていた。夫はある日、キム・ジョンに子どもを一人持とうと提案した。「僕もちゃんと手伝うからさ……」と語る夫に対し、キム・ジョンは出産後も仕事を続けられるかという不安や、子どもの預け先を考えることへの罪悪感について夫に説明した。「でもさ、ジョン、失うものことばかり考えないで、得るものについて考えてごらんよ。親になることがどんなに意味のある、感動的なことかを。それに、ほんとに預け先がなくて、最悪、君が会社を辞めることになったとしても心配しないで。僕が責任を持つから。君にお金を稼いでこいなんて言わないから。」という夫の話に、キム・ジョンは「それで、あなたが失うものは何なの?」「失うものことばかり考えるなって言うけれど、私は今の若さも、健康も、職場や同僚や女友だちという社会的ネットワークも、今までの計画も、未来も、全部失うかもしれないんだよ。だから失うものことばかり考えちゃうんだよ。だけど、あなたは何を失うの?」と言い返す。キム・ジョンと夫

の対話は、男性は結婚がキャリアに影響をもたらさない反面、女性にとって結婚は育児を担うことで社会との関わりを失うことを意味し、結果、夫婦の何気ない会話に認識の齟齬をもたらしている。

④家事・育児を「手伝う」やさしい夫と世間（男性）のまなざし

家事・育児の場面では、夫の「手伝う」という言葉に代表されるように、男女間の認識の差が原因となり夫婦喧嘩をするシーンがみられる。キム・ジョンは出産後の生活について何度も話し合ったが、結局キム・ジョンが会社をやめて子どもの世話をすることになった。自分も手伝うという夫の言葉に、「その『手伝う』っての、やめてくれる？家事も手伝う、子育ても手伝う、私が働くのも手伝うって、なによそれ。この家はあなたの家でしょ？あなたの家事でしょ？子どもだってあなたの子じゃないの？それに、私が働いたらそのお金は私一人が使うとでも思ってたの？どうして他人に施しをするみたいな言い方をするの？」と言った瞬間、夫は口ごもり、結局ごめんと謝る。キム・ジョンの夫はやさしい夫であるものの、これまでの男性の生き方を内面化しているため、悪気なく言った夫の発言はキム・ジョンとの間に口論をもたらしているのである。だが、問題は夫ではなく、世間のまなざしである。公園に娘をつれて散歩に行き、ベンチに座って一杯のコーヒーを飲んでいると、近くに座っていた会社員の男性は、同僚に「僕も旦那の稼ぎでコーヒーを飲んでぶらぶらしたいよなあ。。。ママ虫<sup>2</sup>もいご身分だよなあ」とつぶやいた。

⑤社会復帰をしたものの：「経断女」の葛藤

それなりに教育を受け、出産前はキャリアを築き上げてきたものの、出産と育児というブランクを経たあとに女性が得られる仕事は、単純労働などのパートタイムに限られている。フルタイムの夫に対して、保育園に預けた子供の送り迎えを母親が担わなければならないことを考えると、一日の労働時間が限られていることも大きなネックとなる。そして、退職前の条件で働くためにはさらなる教育が必要となる。キム・ジョンは娘を保育所に預けながら、適当なパートの仕事がないか探したが、アイスクリーム販売のパートの仕事しか見つからない。夫はジョンに「自分がやりたい仕事をしているのに、やりたくない仕事をやれとは言えない」と伝える。キム・ジョンは今後の進路について悩み、広告代理店で働いているときから、いつも記者になりたかったことを思い出す。まず、勉強できる教育機関を探してみたが、すべて授業が夜に開講され、保育園に預けている時間帯と合わない。夫の帰宅と入れ替えて受講することも考えたが、授業の半分は逃してしまう。ベビーシッターを雇えばもっと費用がかかる。やりたい仕事ができる環境にはなかったと落胆するキム・ジョンの姿はそれを物語っている。

精神科医のカウンセリングの記録は以上である。キム・ジョンの様態が回復しない状況でストーリーが終わる。だが、今精神科医は、同じ病院の女性スタッフが出産で

退職することになったため、彼女が担当していた患者を失うことを憂慮している。後任には未婚の人を探さなければと考えている。

### 3) 韓国での評価

『82年生まれ、キム・ジョン』は、10代～30代の女性と40代～60代のリベラル知識人男性を中心に圧倒的な支持をえたものの、10代～30代の男性はほとんど読まない状況で本書を批判する論調がめだつた<sup>3</sup>。ある国会議員が文在寅大統領の就任記念に「女性が平等な夢を見ることができる世界を作ってほしい」とプレゼントした反面、K-popアイドルのRed Velvet・アイリーンが「読んだ」と発言しただけで男性ファンの中で炎上した。女性の雇用促進をはじめとした女性の権利獲得や人権問題が浮上すると同時に、雇用の流動化が加速化し、若者世代の間に就職難が深刻化する中で、女性にポストを奪われるという（若い）男性の被害者意識が高まったためである。すなわち、2000年以降の女性嫌悪現象の要因は、これまで「劣った性」として女性差別するのではなく、「(女性が)不当にめぐまれている」という逆差別を受ける男性の被害心理を表したものであった<sup>4</sup>。男性の被害意識の背景には「徴兵制」が男性に課せられている点も要因の一つにあげられる。就職難ゆえにただでさえ就職時期が遅れる上に、2年間の徴兵制はハンディとして捉えられているのである。2016年5月には「江南駅刺殺事件」が起き、加害者の男性は「女性なら誰でもよかった」と発言し、韓国社会に大きな衝撃を与えた。同年7月に『82年生まれ、キム・ジョン』が出版され、100万部のベストセラーになったことは、Me Too運動の拡散と同時に、女性嫌悪現象を加速化させる要因にもつながっていったのである。2019年10月末には、『82年生まれ、キム・ジョン』の映画が韓国で公開されたが、映画レビューには女性は5点満点が多いのに対して、男性は1点を付けるなど対照的な評価が見られる。

一方、『82年生まれ、キム・ジョン』は美学的・芸術的作品ではないという点で文学界での評価はあまり高くない。本作品は、実際の経験を鮮明に描き、かつ報告書や統計資料などを用いてストーリーが明解に描かれているという点で、これまでの正統派とされてきた文学作品の基準から見ると、大きくかけ離れているという指摘である。この評価に対して、ホ・ユンは『82年生まれ、キム・ジョン』のブームを批評家と読者の区分がなくなった点を指摘する。すなわち、これまでの文学界の評価を基準とすると、読者の存在が過小評価されたことは明らかであり、『82年生まれ、キム・ジョン』のブームをきっかけに、読者を通じた本書の社会的意義を再考しなければならないと述べる<sup>5</sup>。

## 第3章 「共感」がもたらした「私の物語」－日本における『82年生まれ、キム・ジョン』大ヒットの背景と現状分析

### (1) 日本社会における『82年生まれ、キム・ジョン』ブーム

日本では韓国での出版から約2年後の2018年12月に『82年生まれ、キム・ジョン』が刊行され、13万部を越えるベストセラーとなった。これまで韓国文学と言えば、『太白山脈』や『土地』など韓国の近現代史を描いたものが多くを占め、時代背景への理解なしに日本の読者に受け入れられるにはハードルが高かった。それとは打って変わり、本書は日本のメジャー出版社である「ちくま書房」から刊行されたこともあり、多くの書店で大々的に宣伝がなされ、ベストセラーとなった。何よりも本書は読者レビューをはじめとした口コミで広がっていき、著者イベントや韓国文学、フェミニズム関連のイベントが数多く開かれた。2019年2月19日、著者のチョ・ナムジュが来日して行われたイベントは、即満席となった。同年8月31日には、『韓国文学トークイベント チョ・ナムジュ×斎藤真理子』が京都・今出川の同志社大学にて開催されたが、応募者が多数のため抽選となった。『82年生まれ、キム・ジョン』を皮切りに韓国の現代小説は次々と翻訳され<sup>6</sup>、現在ブックカフェ「チェックリ」での読書会をはじめとした韓国文学・文化関連のさまざまなイベントが開催されている。雑誌『文藝』は2019年秋号にて「韓国・フェミニズム・日本」を特集したところ、わずか5日で重版が決定し、17年ぶりとなる重版が実現された<sup>7</sup>。

さらに、『82年生まれ、キム・ジョン』をテーマにした番組「目撃! にっぽん『キム・ジョンと女性たち～韓国小説からの問いかけ』(NHK、2019年8月25日放送)が制作され、妻の社会復帰と子育ての分担をめぐる夫婦の葛藤、就職活動の際セクハラを経験した20代女性、親の都合により大学進学ができなかった姉と大学進学した弟との対話等を扱った。

このようなブームの中で、日本の読者は『82年生まれ、キム・ジョン』のどこに共感し、自らの生を言語化していったのであろうか。本章では、以下4つのサイト(アマゾン:158件、読書メーター:1024件、ブックライブ:36件、honto:198件:すべて2019年11月3日現在)のレビューを中心に分析した。全般的なレビューの傾向として、性別は標記されていないものの、読者レビューの約8割が女性、約2割は男性による投稿が見られた。嫌韓的なコメントやミソジニー現象はほとんど見られず、本書やフェミニズムについて語る「対話の場」となっていた<sup>8</sup>。読者レビューということもあり、漠然とした感情表現や、韓国女性の体験談について「韓国がここまでひどいとは?」という意見が見られる反面、「日本も同じだ」といった日韓の同時代性に言及したレビューが多くみられた。さらに、男児選好や、それと関連した生活習慣、高校までの教育現場での経験など、キム・ジョンの幼少期・青年期の記憶については、キム・ジョンよりも年配世代の読者層が似たような経験をしたことを語っていた。比較的キム・ジョンと同年齢か若い世代は、大学進学、就職活動、会社勤めとライフコースの後半に移行するにつれ、自らの経験を語るケースが多くみられた。現在により近い過去における自らの生の言語化は、それだけ日韓が同時代的かつ標準化された経験を歩んできたことを証明している。以下、本章では、1)「言葉」を与えられた読者、2)学校教育におけるジェンダーの格差、3)就職活動と職場におけるMe Too経験、4)退職と社会復帰におけるキャリアの断絶という視点から分析し、ライフコースの

節目における読者の感情や葛藤について考察していく。

## (2) 『82年生まれ、キム・ジョン』レビュー分析

### 1) 「言葉」を与えられた読者

本書のストーリーは平凡な女性の日常を描いたものであり、大きな山場を迎えるようなストーリー構成にはなっていない。しかし、だからこそ多くの読者がそこに自分の人生を投影し、自分なりの物語として再解釈したと捉えることができる。注目すべき点は、読者の多くが「胸が詰まる思い」「つらかった」「わかりすぎてきつかった」「無数の悲しみ」など「感情」について語っていることである。つまり、ブームの要因はこの小説がこれまで自分が言葉で表現できなかった感情に言葉を与えたという点に要約できる。小説家の星野智幸は「小説は語れなかった名もなき感情に言葉を与えることができる」からこそ、読者が熱狂する点を指摘する。

小説は語れなかった名もなき感情に言葉を与えることができる。だから、韓国中の女性たちがこの本に熱狂したのだ。自分の中の言葉にならなかった、声に出せなかった感情が、ここにすべて書かれているから。－星野智幸（「ちくま」2019年1月号書評より）

別の言葉で表現すれば、『82年生まれ、キム・ジョン』を通じて、日本の女性の多くはその内容に共感し、「私の物語」を発見したのである。そこには、これまで女性の人生として当たり前だと考えられてきた事柄が、男尊女卑思想に基づく女性差別の産物であり、社会的に構築されたものであったことへの「気づき」を得たことである。レビューには、読者が自分の人生を回顧することで自分自身を解放した経験が描かれている。

私が感じていた言葉にならない違和感が、言葉になっていました。

(Aさん 読書メーター 2019年10月4日)

これは私の物語だ！の謳い文句通り、子供の頃から積み積みしてきた虚しさが掘り起こされて辛い。

(Bさん 読書メーター 2019年10月7日)

読みながら胸が苦しかった。国は関係なく、実在の、今もどこかで苦しむ女性の人生と一緒にたどるように読んだ。

(Cさん 読書メーター 2019年9月1日)

女性として生きる上での度重なる違和感や複雑な感情の背景には、言葉で伝えることで怒りや対立を露わにするのではなく、周囲の調和を乱すまいと「うまくかわす」ことが教育現場や職場では好ましいとされてきたことがあげられる。だが、女性読者の中には『82年生まれ、キム・ジョン』を通じて、長年心の中に溜まった違和感、不快感が一気に感情として吐き出されたケースがみられる。



『82年生まれ、キム・ジョン』を読んでいると過去にフリーズさせてしまった自分の感情が次から次へと溢れてくる。……まだフェミニズムやミソジニーという言葉も知らなかった頃、男尊女卑、女性蔑視、男女差別という言葉は知っていても、自分の受けているものがそれにあたると考えもしなかった頃、まるで当たり前のようにそうされて、私の中の何かがぐわっと溢れ出そうになってもこの場面ではすぐわなないような気がして、すぐにははと笑ってみたり。そうだよーと平坦な返事で流してみたり。ちょっとだけ嫌な顔して、でも本気で捉えてないよって微妙な表情を作ってみせたり。その場の空気が凍りつくのを恐れて、自分の感情を凍りつかせた。……ほんとは怒っていたんだ。あの時もあの時もあの時も。ほんとはぶん殴ってやりたかった。つまり、傷ついたんだ。自分が“女”扱いされたことに。そしてその“女”がまるで男よりも下等な生き物であるかのような設定であったことに。……でも、もっと些細な、いや些細だと思いきもうとしていた日常の中に入り込んだ棘みたいなものが、今いっぱいいっぱい疼きだす。……

(Dさん アマゾンレビュー 2019年3月5日)

Dさんの場合、これまでの人生において何か「違和感」「不快感」を感じながらもその原因がわからず、かろうじてその場から逃げ切るための表情を取り繕うことで人生を歩んできた。だが、『82年生まれ、キム・ジョン』を通じて、これまでの自分の感情を表現する「言葉」を得たことで、過去の感情から解放されたと同時に、その感情は「痛み」へと変化していったことがわかる。「感情」を表現するレビューは、女性のライフコースにおける大学受験、就職活動、仕事、結婚、育児と後半に移行するにつれ、より具体的な記述となってあらわれてくる。

## 2) 学校教育におけるジェンダーの格差

家庭でも、学校でも、会社でも、結婚も出産も、なんでこんなに男と女は違うのだ。なんで、女性は不利なんだ。男女平等の時代、勉強は男性と対等に競って頑張れ！と言われてきた。なのに、女性のゴールは幸せな結婚。自分にとって素晴らしいパートナーではだめで、家族にとって幸せで、子どもは当然いること。仕事を諦めるのは女性、当然のことながら。このモヤモヤをよく書いてくれた！

(Eさん honto 2019年10月4日)

Eさんの語りは、未だに変わらない女性のライフコースを的確に表現している。現代が男女平等の時代は言うまでもなく、昨今は「女性活躍の時代」と言われており、勉強も男性に劣らず懸命にやってきたものの、結局、女性の幸せは結婚して子供を生み育てることへの違和感を描いている。それなりのキャリアを築きあげてきたものの、結婚や出産を機に仕事をやめる女性を、韓国では「経断女(ケダンニョ)」と呼ぶ。この空白が前提となった企業制度は、男女の賃金格差を生み出し、出産、育児からの社会復帰した女性に与えられる仕事のほとんどが非正規労働者となる。

世界経済フォーラムの2018年度「ジェンダーギャップ指数」によると、149か国中、

1位アイスランド(0.858)、2位ノルウェー(0.835)、3位スウェーデン(0.882)と北欧諸国がトップ10にランクインし、フランス、ドイツ等西欧諸国が20位にランクインしているのに対し、韓国(0.657)は115位、日本(0.662)は110位と、日韓ともに最下位に属している<sup>9</sup>。それぞれの雇用形態・賃金格差等における男女別の非正規雇用の割合は、日本(内閣府男女共同参画局, 2017)が女性(55.5%)、男性(21.9%)、韓国(統計庁「経済活動人口調査」, 2017)が女性(41.2%)、男性(26.3%)となっており<sup>10</sup>、男女間で2倍以上の格差があることがわかる。男女平均賃金格差についてのOECD調査(2016)によると、男性を100とした場合、女性の平均賃金がどのくらいになるかを数値で表すと、OECD平均が86.9に対し、韓国は63.3、日本は74.3とそれぞれ最下位と2位に位置づけられている。

では、こうした男女格差はライフコースのどの時期からはじまるのだろうか。まず、教育についてであるが、大学進学率の男女差は年々縮まり、2019年度は男子56.3%、女子50.1%とはじめて5割を超えたものの、女子が男子を上回ったのは2都県のみで、地域格差も存在する。大学全入時代と言われる今日も、地方では「娘は無理して大学に行かせても……」といった考えが根強くある<sup>11</sup>。事実、FさんやGさんの語りからは、平成生まれの世代ですら、女の子は教育、就職等実家の近くにいるべきであるとの認識が社会に蔓延し、学歴を積んだ女性や収入の多い女性に抵抗感をもつ男性の話が語られている。

1989年、平成生まれの私ですら同じような経験がある。

「女の子を東京の大学に行かせるなんて」

「女の子には実家の近くにいる、面倒を見てもらった方がいい」

(Fさん honto 2019年7月5日)

学生時代、バイト先の上司から学歴を積んだ女なんて誰も結婚したくないと言われた。前に付き合っていたひとからは、先に就職されて、私のほうが収入が多くなるのが嫌だと言われた。

(Gさん ブックメーター 2019年10月23日)

上の2つの語りからは、家庭や身近な恋人の女性へのまなざしが「保護」と「支配」の論理になりたっていることがわかる。ベネッセ教育総合研究所が2015年、未就学の乳幼児をもつ保護者を対象に行った「幼児の生活アンケート」においても、母親3200人余りが回答した「子供に対する期待」では、男子に「4年制大学卒業まで」期待する割合が79.7%であったのに対し、女子は66.9%であった。さらに、2019年6月、西日本鉄道(福岡市)が「神様。どうか、娘の希望する大学が福岡県内でありますように。」とのコピーを添えた広告を出し、福岡女子大の和栗准教授は撤去を訴えた。「なぜ、『娘』は県内なのか。こうした広告は、女性は親の目が届くべきであるというジェンダーによる偏見を助長する」と疑問を投げかけたのである<sup>12</sup>。つまり、女性の多くは、本人の進路希望以前に、地元の大学に進学するケースが多くみられる

といえる。教育熱の高い韓国では、昨今女性の大学進学率が73.8%と、男性の65.9%（2018年度）<sup>13</sup>のそれを上回っているものの、就職に関してはジェンダーの格差が存在する。一方、日本の女性への教育投資やキャリア形成は、本人の努力以前にすでに親の教育への姿勢が大きく影響しているといえる。

### 3) 就職活動と職場における Me Too 経験

就職という社会への関門を通過するための就職活動や、入社した後の職場経験において、読者が最も多く語った内容は、結婚や育児を前提とした女性へのまなざしである。つまり、女性雇用を結婚するまでの一時的な労働として捉えており、そのようなまなざしは就職試験の面接への質問事項にも表れている。

教育実習の先生が「就職試験で男性には質問がそれぞれ10分程度あったの、女の私たちは1つか2つ質問があっただけ、負けちゃいけないよ」と教えてくれたこと、関係ない仕事の接待にも私は連れて行かれたこと、タクシーの運転手にいいお尻だねとか言われて知らない道でもすぐさま飛び降りて歩いて帰ること、転職の面接で子供はいつ頃？と神にしか分からない質問をされること、結婚してるのにどうして働くの？と100回は質問されたこと、私が相手より若くて女だというだけで全てに対して無知と思われること、小さい事から大きな事まで、もう、止めどなく、溢れて溢れて止まらなくなった。気付かないフリしてたけど、わたし、全部、すごく嫌だった！

（Hさん honto 2019年2月15日）

（就活の面接で）今彼氏はいますか？総合職だと転勤があって結婚が難しいですよ（と言われました。）

（Iさん honto 2019年7月5日）

Hさん、Iさんともに、面接者に対して仕事への熱意や考えを語る機会はおろか、女性という理由で結婚退職を前提とした一時的労働の対象、性の対象、無知な存在として扱われている。このような社会（会社）でのまなざしは、職場での女性の存在は、能力よりも「女性らしさ＝かわいらしさ」を求める方向につながっている。Jさんは理系大学院を卒業し、それなりの学歴と経験を積んできたにもかかわらず、仕事の評価の理由が彼女の能力に注目するのではなく、「可愛いから」「女性だから」という「かわいらしさを求められる」環境に大きな不快感をあらわにしている。そのような環境は、Kさんのように勤務時間のみならず、退社後の接待も断れきれず、結果的にキャリアにつながらない長時間労働へとつながっている。

日常に染み込んでいる男尊女卑について。私も理系大学院を卒業し、コンサル会社勤務と割と男性社会で生きてきた日々何かで評価される際には「彼女は可愛いから」、「彼女は女性だから」と言われ続けとてもとても辛かった。褒めなくていいから同じ土俵に立たせて欲しかったなんでこんなに辛い思いをしなければならないんだろう。せめて、本書のように日々女性が感じていることをもっともだと発信する媒体が増えればいいな、と思った。

(Jさん 読書メーター 2019年11月3日)

社内のおっさんたちとの夜の飲み会に付き合うことなどどうでもよかった。しょうもない下品な話に付き合う必要などなかった。その分評価を下げられたとしても、長い目で見ればなんてことなかった。その分、映画でも見て、自分を楽しめばよかった。

(Kさん honto 2019年6月9日)

私自身も若い頃に「女のくせに。。。」「だから女はダメなんだ」などと揶揄され、セクハラも日常茶飯事で、嫌な思いを何度もしてきた。だからジョンの気持ちが痛いほど分かる。こうしてこのような本が男女問わず多くの人に読まれて反響を呼び、社会が少しでも良くなってくれることを願ってやまない。

(Lさん honto 2019年9月5日)

J、K、Lさんの語りからは、職場での仕事の延長線にある接待やセクハラともいえる性的な発言に日々不快感を抱きながら職場生活を送っている女性が少なくないことがわかる。Kさんの「映画でも見て、自分を楽しめばよかった」という発言は、自分に何のメリットももたらさない飲み会に行く代わりに、自己投資をしたかったことへの後悔の念を表している。

読者の語りが意味することは、学校教育の進路をめぐる男女格差は存在し、就活においてそのハードルはよりいっそう高くなる点である。「『男女平等は教育現場だけの幻想』就活で感じたハードル」(『朝日新聞』2019年6月26日)では、東京都の女子学生が女子学生対象の就職説明会に行った際、講師の「結婚・子育てと仕事を両立させましょう」という言葉に、「子育ては女性がやるもの」という決めつけを感じたことを語っている。一方、ある会社の最終面接で不採用だった女子学生が、その理由について採用担当者に尋ねたところ、「長く働いてくれそうな人を採用している」と答えたことに対し、出産を「リスク」とみる企業では、女性であるだけで採用のハードルがあがると語った。

さらに、指摘すべき点は、Me Too運動と関連したセクハラ発言やセクハラ行為である。日本では今だ女性に対する就職差別はもちろんのこと、セクハラ発言やセクハラ行為はなかなか可視化されず、勇気をもって声をあげても女性の自己責任となる判例が後を絶たない。男性中心の社会空間においては、人権をとりまくグローバルな視点が、未だに欠如しているといえる。

#### 4) 退職と社会復帰におけるキャリアの断絶

「それで、あなたが失うものは何なの?」。このせりふは、キム・ジョンが退職をす

ることで職場や同僚などの社会的ネットワークをすべて失うかもしれない不安や葛藤を表した内容であるが、このせりふに読者の多くが共感した。先述した「経断女」という言葉のように、結婚、妊娠、出産、育児等により離職する女性の割合が高く、韓国では5人に1人が離職している（「統計でみる女性の生活」統計庁、2015）。各年齢層における経済活動の割合を見てみると、20～29歳が63.8%、30～39歳が58%、40代以降は66.7%とM字型を描いていることが分かる。一方、日本は1人の子供を産む際には100人中47人が離職している（国立社会保障・人口問題研究所「第15回出生同校基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」2015年）。すなわち、非正規、低賃金、単純労働など女性労働の周辺化の背景には、育児が女性にまかされた仕事であるという認識の下、結婚・出産を機に離職する女性の割合が高いことがあげられる。Mさんは、退職した後の自分自身の居場所について不安を抱いた点で「わたしの物語」だと語る。

それで、あなたが失うものはなんなの？ 私も妊娠するなか同じことを思った。休職して、キャリアが止まる、会社での居場所を心配する、子どもがどう育つか不安になる、体の変化も凄まじい。でも、父親はなににも変わらない。キャリアを止めることも、有給の心配も、残業のことも。変えられないと言いきれば、女がなんとかすると思っている。キム・ジョンのお母さんが、先を見ているひとでよかった。彼女の先は、本書では見えていない。私は仕事が救ってくれた。彼女にも、彼女たちにも、救いが見つかるといい。これは、わたしの物語でもある。

（Mさん 読書メーター 2019年8月6日）

Nさん、Oさんのケースも同様、出産・育児を機に退職し、社会とのかかわりから完全に離れてしまうことへの不安と葛藤が描かれている。これまで築き上げてきた社会との接点をすべて失うということは、アイデンティティーの危機を経験することを意味する。そして、子育てがひと段落した後で得られる仕事といえば、その多くが非正規かパートタイムの仕事しかないのが現実である。

私はキム・ジョンよりもその母親に近い世代だが、小学校中学校と同じクラスだったとっても優秀だった女の子は短大からジャルのスチューデントになって国際線に乗っていたけれど結婚退職されたって聞いた。妻はジョンの姉より上の世代だけど、娘を産んで退職して娘が小学校入学を機に非正規として復帰した。私より優秀な人だったのに。妻はずっと仕事辞めた。

（Nさん 読書メーター 2019年10月27日）

今、社会の枠組みの中に納まっている人には今ひとつピンとこないかもしれないが、結婚、出産、育児と一つ一つ社会とのかかわりを手放し、枠組みから外れて行ってしまった人間には痛いほどの共感を与える本だと思う。

（Oさん ブックライブ 2019年9月26日）

何よりも、女性の離職率の高さは、女性が働きやすい制度の不備と社会的な認識の低さが背景にあるといえる。一度、職場を離れて、再度就職する際には非正規職とい

う女性の就労パターンはM字カーブと呼ばれ、20代で学校を卒業して働き始め、30代で出産・育児に専念、子育てが一段落した40代で再び職に就くという日本女性の働き方の特徴を表す。この背景には、「女性は家事に専念すべき」という考え方が根強く残っているためだといえる。結果、子育てが一段落して社会復帰したとしても、得られる仕事はパートタイム（非正規労働）が大部分である。注目すべき点は、「M字カーブ」を描いているのは日本と韓国だけであり、ドイツやアメリカなどの欧米諸国では、一定の年齢層で労働力率が下がるということはない。その背景には、女性の働き方に対しての柔軟性が高く、地域の子育て支援の環境が整っていることなどがあげられる<sup>14</sup>。

以下のQさんのレビューは、娘の時代にも結婚後の社会における自己実現や女性の働き方は何も変わっていないことを残念に思い、孫の時代には女性にも自己実現のできる社会になっていることを願う内容となっている。

私の娘2人はそれぞれ素敵な人を見つけて無事結婚しましたが、家庭のために退職したり、転職したりしています。幸せそうではありますが、本当はもっと好きな仕事をしていてほしいかと思ったりもします。……………孫娘が大人になる頃までは、女性が結婚後も自己実現できるのが当たり前の世の中になってほしいと切実に願っています。そのためにも一人でも多くの人にこの本を読んでほしいです。 (Pさん ブックライブ 2019年4月23日)

読者レビューには、男性のレビューも少なからず見られた。ある読者は「多くの人に聞きたい。あなたが放つその言葉は自分の娘にも言えるのか？と。僕自身が本を読んでそう問われていると感じた。(honto 2019年1月13日)」と語っていた。この発言は男性が女性の生について省察する上で、最も説得力のある指摘だといえる。

#### 第4章 日本におけるフェミニズム運動の現在（『82年生まれ、佐藤由美子』はいつ生まれるのか？）

本稿は、日本における『82年生まれ、キム・ジョン』の受容の観点から、日本の女性は自らの生をどう言語化したのかについて、読者レビューを中心に考察した。これまで言及してきた読者レビューからは、①「私の物語」を発見し、国境を越えた共感を得た点、②自分の感情を表現する「言葉」を得た点、③これまで女性の人生として当たり前だと思っていた事柄が、男尊女卑思想に基づく女性差別の産物であり、社会的に構築されたものであったことへの「気づき」を得た点に要約できる。文学研究者のホ・ユンは、(허윤, 2019: 204) は、『82年生まれ、キム・ジョン』が20代～40代の女性読者に圧倒的な支援を得た理由として「誰とも闘ったり葛藤しない『親切的な』フェミニストのナラティブであった」点に注目しているが、日本の読者レビューにも以下のようなコメントが投稿されている。

どうしてこのような本が出てこなかったのだろう。フェミニズム女史の上から目線の本にはない。これぞ女性学の決定版と言っても良いほどの充実した内容である。簡単に会社を辞した自分。孤独に育児していた自分を切なく思い出したりもしたが。

(Qさん 読者メーター 2019年9月25日)

「フェミニズム女史の上から目線の本にはない」というコメントは、これまで日本のフェミニズム(フェミニスト)が多くの子生、社会人、主婦の生を代弁してこなかったことを指摘している。すなわち、より多くの女性に支持された理由は、「喚起」ではなく「共感(共に痛みを分かち合い、共に考える)」という「女性の分断」ではなく「包摂するフェミニズム小説」であったからだといえる。

この点は、本書が文学作品である点も大きい。日本では、『82年生まれ、キム・ジョン』ブームをめぐる解釈は文学者が主流をなしている。本書の翻訳者である斎藤真理子は、ここまでブームになった理由の一つに日韓の女性が置かれている状況の類似点とともに、「翻訳作品である」点に注目し、本書のタイトルが82年に生まれた日本の女性の名前で一番多かった「佐藤由美子」であったならば、ここまでは売れなかったであろうと指摘する。すなわち、日本の小説であったならばあまりにリアルすぎて距離感を保てない。一方、欧米文学作品であったならば、そこまで感情移入できない。その点で、韓国の小説は一定の距離感を保ちながらも感情移入できる点で、より多くの読者に共感と呼んだと指摘する<sup>15</sup>。

『82年生まれ、キム・ジョン』に共感をもった日本の読者たち、読書会に参加し「対話の場」に自ら足を運んだ読者たちは、今後どこに向かうのだろうか。本書を読み、韓国の女性は「怒り」、日本の女性は「泣いた」というエピソードはそれを端的に物語っている。つまり、「泣く」行為は個人が癒しを得ることを意味する反面、「怒り」は社会運動へとつながる可能性を秘めている。韓国では、民主化以降から2000年代に至るまで女性の権利を求める運動の成果により、政府機関としての「女性部(のちに「女性家族部」の設置)」や「家族関係登録簿」の導入などさまざまな政策や法律が制定された<sup>16</sup>。2010年以降になると、「私はフェミニストだ」と宣言する欧米の流れを受けたMe Too運動が加速化し、性暴力の言説化、可視化とともに、慰安婦問題をジェンダーから捉える視点や幼い子どもへの性暴力問題など多角的な視点からとらえる動きが活発化した。女性への性暴力被害が次々と告発される中で明らかとなった点は、男性が女性に性暴力を行う背景には、職場をはじめとした公的領域における権力関係が大きく影響している点である。中でも、映画界や人文系関連の良識ある知識人団体と言われてきた業界や著名な知識人によってなされた数々のセクハラや性暴力事件は韓国社会に大きな衝撃を与えた。

一方、日本においても2010年以降、安保法制反対運動など若者世代を中心になされた運動は一時期注目を浴びたものの、社会運動によって政治を変えてきた経験は皆無に等しい。その背景には、「自分で問題を解決する」という「自己責任論」がある。つまり、「社会の問題」として捉えられるべきところを「個人の問題」として捉えら

れる傾向がみられ、結果、人々の連帯や共感が生まれにくく、具体的な施策につながっていないのが日本社会の現状といえる。このような視点は、2010年以降のMe Too運動の流れも同様である。欧米諸国や韓国ではさまざまな男性著名人が性暴力を告発されたにも関わらず、日本では女性が政治家やジャーナリストの性暴力を告発しても、女性の責任とされるなど二次被害を受けるのが常である。

こうした日韓の社会運動の流れの相違は、社会におけるフェミニズムの位置づけの相違にもつながっている。何よりも、日本では『82年生まれ、キム・ジョン』を個人的な共感というレベルで消費する傾向が見られる。この点は、斎藤真理子曰く「佐藤由美子」ではなく、「キム・ジョン」であったがゆえに違和感なく受け入れられたと同時に、現実の「由美子」に目を背けている部分があると言えるのではないか。

一方で、『82年生まれ、キム・ジョン』が13万部を超えるベストセラーになったことを通じて、多くのメディアでは、日本の大学進学率の男女格差や女子学生への就職差別、家内・主人といったジェンダー格差用語への問題提起がなされはじめている。昨今は、医学部の入試における女性合格者の調整、それに言及した上野千鶴子による「東大祝辞」は社会に大きな反響をもたらした。さらに、ある女性雑誌では、女性目線からの発言「(男性が)きちんと家のことやるなら働いてもいいよ」(女性雑誌『VERY』2019年1月号)が発売され話題となった。

だが、こうした動きは過去にもあった。『82年生まれ、キム・ジョン』がブームになる2年前の2016年、30代半ばの子育て中の女性がブログに載せた「保育園落ちた、日本死ね」(2016.2.15/30代前半女性)の反響は、日本版のMe Too運動ともいえ、『82年生まれ、キム・ジョン』ブームに匹敵する影響を日本社会にもたらした。ハッシュタグ「#保育園落ちたの私だ」が拡大し、同年3月には国会前での抗議デモが行われる中で、ネット署名運動では2万8千人に膨れ上がった。結果、政府は「待機児童ゼロを実現させる」ことを公約に掲げた。ところで、今日『82年生まれ、キム・ジョン』の読者の中に、「保育園落ちた、日本死ね」を思い出す人はどれだけいるだろうか。そして、昨今のシングルマザーの貧困問題、介護福祉士の低賃金労働が女性の家事労働と同一に捉えられているところからくる問題であることを想像する人はどれだけいるのだろうか。結局、さまざまな立場にいる女性たちが連帯することを通じて、日本に生きる女性たちの生は少しずつ主体性を回復し、社会を変えていくことができるといえる。そして、『82年生まれ、キム・ジョン』の日本版『82年生まれ、佐藤由美子』が今後生まれるためには、女性という周辺化された生へのまなざしが生み出す多様な労働や生活の現状ひとつひとつを結び付ける想像力が今必要とされているといえる。

---

<sup>1</sup> これまで女性が「〇〇さんの奥さん」「〇〇ちゃんのお母さん」のように名前では呼ばれるのではなく、男性や子供中心の観点から見た属性として呼称されてきたことへのミラーリングの実践である。



- <sup>2</sup> 育児もろくにせず遊びまわる害虫のような母親という意味でのネットスラング（本書P158より）。
- <sup>3</sup> ソウルの教保文庫が2018年12月に発表した今年ベストセラーの性別・年齢別分析結果によると、本書は女性の年齢層全般にわたって上位にランクインした。10代で1位、20代で2位、30代で3位、50代で2位を記録した。一方、男性は10代、20代、30代、60代では10位内にも入らず、かろうじて40代で9位、50代で7位にランクインした。教保文庫の関係者は、「40代以上の年齢層で本の売上げが急減するため、40代から50代でそれぞれ9位、7位を占めても注目すべきほどの販売量ではないと述べた。（『82年生まれ、キム・ジョン』に男性は距離をおいた）『ソウル新聞』2018年12月12日付）
- <sup>4</sup> このような傾向は、昨今の在日コリアンに対するヘイトスピーチにも見られる。ヘイトスピーチに参加する人々による在日特権とは「特別永住資格」「朝鮮学校補助金交付」「生活保護優遇」「通名制度」を指すが、中でも「特別永住資格」は「国籍条項」によって外国人（在日コリアン）は排除されていた社会保障（国民年金、生活保護等）が、1982年の難民認定法制定以後「国籍条項」が撤廃され、社会保障が受けられるようになったことを指す。つまり、もともと日本に在住していたオールドカマー在日コリアンには社会保障が付与されなかったが、難民認定というニューカマーへの配慮（社会保障認定）によって、オールドカマーも社会保障の対象となったといえよう。（福島みのり（2019）参照）
- <sup>5</sup> 허윤（2019: 191-206）[로맨스 대신 페미니즘을!]（소영현 외 『문학은 위험하다』 민음사）参照。
- <sup>6</sup> チョ・ナムジュ、チェ・ウニョンほか（2019）『ヒョンナムオッパ』（白水社）、キム・ヘジン（2018）『娘について』（亜紀書房）、イ・ミンギョン（2018）『私たちにはことばが必要だーフェミニストは黙らない』（タバブックス）などがあげられる。
- <sup>7</sup> 「韓国・フェミニズム・日本」特集の『文藝』が“超異例”の重版！「絶対に手に入れるべき」と話題沸騰（「ダビンチニュース」2019年7月13日 <https://ddnavi.com/news/550018/a/> 2019年9月22日アクセス）
- <sup>8</sup> アマゾンのサイトでは、一時期『82年生まれ、キム・ジョン』のコメント欄に韓国男性と思われるミソジニエ的コメントが多く見られた。
- <sup>9</sup> 内閣府男女共同参画局ホームページ（共同参画「2019年1月号」参照。）（[http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2018/201901/201901\\_04.html](http://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2018/201901/201901_04.html) 2019年10月14日アクセス）
- <sup>10</sup> 韓国における女性の非正規労働者比率は、25～29歳層が24.5%と最も低く、同年齢の男性（23.7%）と大差ないものの、女性は30代前半から非正規労働者比率が上昇し、男女間格差が拡大する。男性の非正規労働者比率は50代前半から上昇する（「女性の活躍促進には、人的資源管理制度・慣行の改善が必要」国別労働トピック2018年11月 [https://www.jil.go.jp/foreign/jihou/2018/07/korea\\_01.html](https://www.jil.go.jp/foreign/jihou/2018/07/korea_01.html) 2019年10月12日アクセス）

- <sup>11</sup> 東京の場合、男子の進学率が72.2%に対し、女子は73.2%であり、徳島では男子45.3%に対し、女子が47.3%（文部科学省「学校基本調査」より）となっている。（「女子の進学率、男子と格差、45都府県で下回る」『朝日新聞』2019年10月9日付）
- <sup>12</sup> 『『男女平等は教育現場だけの幻想』就活で感じたハードル』（『朝日新聞』2019年7月10日付）参照。
- <sup>13</sup> [ 통계 N ] 대학진학률 7.9% 높지만 평균임금은 남자의 68.8% (빅터뉴스 2019.7.10) 参照。  
(<https://m.post.naver.com/viewer/postView.nhn?volumeNo=22197086&memberNo=41313890&vType=VERTICAL> 2019年11月5日アクセス)
- <sup>14</sup> 「働き方改革・キャリア」(BIZ HINT <https://bizhint.jp/keyword/39277> 2019年11月5日アクセス) 参照。
- <sup>15</sup> 対談 斎藤真理子×鴻巣友季子「世界文学のなかの隣人～祈りを共にするための「私たち文学」」(『文藝』2019年秋号、pp.52-64 参照)
- <sup>16</sup> 2000年以降の金大中、盧武鉉政権期においては、政府機関として「女性部」(2000年に設立、2010年から「女性家族部」に)が新たに設置され、政治や雇用分野における政策決定過程への女性参加を学期的に強めるきかけとなった。さらに、盧武鉉政権期には、女性運動史における最も大きな成果とされる「家族関係登録法」(2008年)が新設され、①「父姓主義」原則の修正、②姓の変更の自由、③親養子制度の導入など、父姓強制条項が大幅に緩和されるようになった。近年では男性・女性問わず「趙韓恵貞」「金趙光秀」など、苗字に父母の姓を両方名乗る人が増えている。1997年の世界女性の日を記念する韓国女性大会にて、父母の姓を両方名乗ることを宣言したのがはじまりであり、これまで子供の姓は父親の姓を名乗ってきたことに対する女性自らの平等主義の実践であった(「女性の人権とジェンダー」『現代韓国を知るための60章』pp.88-98 参照)

## 主要参考文献

- 石坂浩一、福島みのり編集(2014)『現代韓国を知るための60章 第2版』明石書店
- チョ・ナムジュ、斎藤真理子訳(2018)『82年生まれ、キム・ジョン』筑摩書房
- 조남주(2016)『82년생 김지영』민음사
- 福島みのり(2019)「在日コリアンはどのように表象されてきたのか：多文化共生から排除されたオールドカマーをめぐる言説を中心に」『国際行動学研究』第14巻
- 『文藝』「特集・韓国・フェミニズム・日本」2019年秋号、河出書房新社
- 허윤(2019)「로맨스 대신 페미니즘을！」(소영현 외, 『문학은 위험하다』 민음사)